

パリ材料化学研究室訪問記

岡山大学大学院 自然科学研究科卒

金谷 朋子

Visiting for Laboratoire de Chime de la Matière Condensée de Paris

Tomoko Kanaya

Okayama University

はじめに

岡山大学大学院医用複合材料設計学研究室に在籍していた筆者は、博士前期課程2年時の昨年10月29日より、以前から共同研究を行ってきたBabonneau先生とBonhomme先生のご好意によって、お二人が在籍するパリ大学第6分校の材料化学研究室に約2週間滞在する機会を得た。

本稿では、短い滞在時間で、私個人が見聞きした狭い知見ではあるが、貴重な体験から感じた事を記すものである。

パリ大学第6分校について

パリ大学第6分校は、Universite Pierre et Marie Curieという、ノーベル賞を受賞したフランス人学者キュリー夫妻の名を冠した大学である。

第六分校は、パリ中心部のセーヌ川沿いに位置しており、観光名所であるシテ島のノートルダム寺院から徒歩20分程度の近さだが、観光客の姿が見られない学生街にある。

大学周辺の道沿いには、間口の狭い石造りの店が連なっており、カフェやパン屋、古書や文



写1 近未来的な外観の校舎

房具の店、ゲームやコミックの店などが多く見られた。昼時には、パン屋でサンドウィッチやパニーニを買い求める学生でごった返し、日本の真冬並みの寒さ(気温10°C以下)にも関わらず、外でパニーニをほおぼっている学生をよく見かけた。



写2 オブジェのある中庭

大学の校舎は、周囲の町並みとは異質なデザインの近未来的な建物であった。日本の地上2階部分から上に建物があり、1階部分は通路になっており、中庭には不思議なオブジェがあった。

地下鉄の Jussieu 駅から出てすぐ近くにある大学への出入り口は2カ所しかなく、幅2メートルほどの深い空堀に橋を渡して作っているため、朝や昼時は人の出入りで混雑した。出入り口の門はストライキ時にはバリケードで封鎖され、容易には入れなくなるそうである。

筆者が在籍していた岡山大学は広大な敷地に入り口が何カ所もあり、地域の方の散歩コースになっているほど開かれているため、第6分校は人の出入りに厳重な印象を受けた。

研究室での生活

Babonneau 先生と Bonhomme 先生のご好意によって、約1週間ずつホームステイさせていただいたので、先生方と共に地下鉄で大学へ通学した。朝9時前に到着し、ほとんどの方が帰宅した後の、夜8時前に帰宅することが多かつ

た。

研究室は大所帯で、大学職員と国立科学研究所の研究者と大学院生で構成されていたが、学生は少なく、大半が職員と研究者であるという印象を受けた。

ヒドロキシアパタイトの構造解析をテーマにして共同研究を行っているため、固体核磁気共鳴分光法 (NMR) の専門家である Bonhomme 先生と時間をかけて、直接議論することができて、非常に有意義であった。スピーディに議論が進み、お互いの意欲がそのまま伝わって、モチベーションが一層高まったので、直接会って話すことのメリットを実感した。

Bonhomme 先生は大学職員なので、NMR について授業を持っており、筆者も参加させていただく機会があった。2時間の授業は博士前期課程の学生数人が対象で、前半は様々な NMR の測定手法について講義を行い、後半は先生が一人ずつに与えた NMR に関する英語の論文についての個別の質問時間だった。

基本的に、ほとんどの方がフランス語を母語としているため、授業や研究室内での会話はフランス語で行われるが、先生は筆者のために英語で講義してくださった。

しかし、NMR についてのかかなり専門的な内容であったため、筆者の英語力では一部しか理解することができず、悔しい想いをした。パリ大学の同じ博士前期課程の学生は、英語での講義の内容を理解し、積極的に英語で質問しており、個人的にレベルの違いを痛感した。

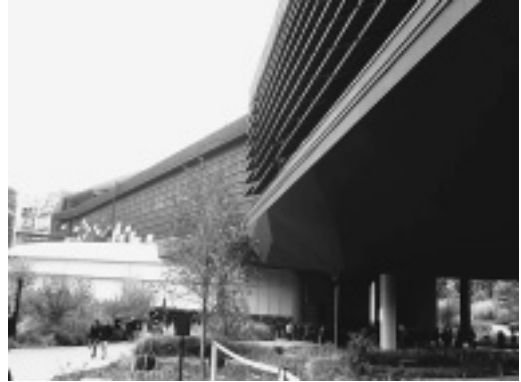
また、Bonhomme 先生の下で、リン酸カルシウムの構造解析を行っている博士課程の学生の NMR 測定を見学させていただいた。筆者が岡山大学で使っている NMR 分光装置とはメーカーが異なっていたため、操作の見学は大変興味深かった。

祝日に

11月1日木曜日はフランスの All Saints' Day という祝日で、研究室のほとんどの方は



写3 エッフェル塔近くにある斬新なデザインのケ・ブランリー美術館



写4 開館時間直後にも関わらず、長蛇の列ができていた

金曜日にも休みにして、4連休を家族と一緒に過ごすそうである。

この祝日を利用して、Bonhomme 先生が musee du quai Branly (ケ・ブランリー美術館) を案内してくださった。パリには様々なジャンルの美術館や博物館がひしめいているが、ケ・ブランリー美術館はオープンしたばかりのパリっ子に話題のニュースポットである。

この美術館は、エッフェル塔の近くのセヌ川沿いに位置している巨大な美術館である。広大な庭の中にフランス人建築家ジャン・ヌーヴェル氏の設計したカラフルで斬新な建物が建っていた。

開館時間直後に到着したが、すでに家族連れやカップルで長蛇の列ができており、注目度の高さがうかがえた。

館内は薄暗く、神秘的な雰囲気 of 展示室に、アジア、アフリカ、オセアニア、アメリカ大陸の美術や文化を象徴する土器や石器、装飾品など約 3500 点が展示されていた。

残念ながら、一部の展示品はフランス語の解説のみではあったが、西洋の美術品とは異なる素朴な味わいの美術品や驚くほど精巧に加工された宝飾品に目を奪われ、見ているだけで十分楽しめた。

ルーブル美術館やオルセー美術館を訪れたことがあり、土器などに興味のある方にはおすす

めである。

最後に

今回の滞在を通じて、共同研究などは人と人とのつながりで成り立っている部分が大きいと感じた。

筆者がパリ滞在の機会を得られたのは、筆者の担当教授である尾坂明義先生が Babonneau 先生と Bonhomme 先生と深い親交を持っておられたからである。世界中の研究者との交流がある3人の先生方は、社交的で、非常に人間関係を大切になさっており、先生方のような研究者になりたいと思った。

今回のパリ滞在中も、ホームステイで暖かくもてなしていただき、フランス語を全く理解できない筆者がなに不自由なく生活できるように、非常に親切にいただいたことに、深く感動した。

筆者に研究室滞在の貴重な機会を与えてくださった尾坂先生、Babonneau 先生と Bonhomme 先生に心から感謝いたします。

筆者は卒業後、企業に就職し、新たな研究分野に取り組むため、学会で先生方にお会いする機会はなくなるが、今回の滞在で得られた素晴らしいつながりを大切に、交流を続けたいと思う。